



しらゆりの家に来たけど、寂しくなってしまうたり、どうして家に帰

仲間の気持ちに寄り添う事は大事

が必要なのかを考え、行動する事にしています。単なる1泊ですが、仲間にとっても職員にとっても安心して、安全に、楽しく過ごすために、一日を通じた姿や生活全般の様子を確認するようにしています。好き腕はどちらなのか、食べ物は何が好きなのか、どれから食べ始めるのか。好きなテレビや歌、トイレの時間、何時に寝るのか、どんな格好で寝ているのかなど些細な事でも聞き取る事を目指しています。日々の生活のちよつとした情報を知る事で、仲間との距離が近づいたり、関係をつくるきっかけとなる場合も多々あるのです。事前のアセスメントの重要性を強く感じます。

れないのか納得できていない状態に来た仲間は、来所したと同時に家に帰りたいという気持ちを職員にぶつけてきます。玄関のドアからじつと外を見ている仲間やカバンを持って帰るアピールをする仲間もいます。その気持ちは痛いほどわかるので、職員は否定することなく、その気持ちを尊重しながら、次の行動のきっかけを作っていきます。一緒に佇み、肩を寄せ合うように外を見ながら声をかけます。トイレから出るきっかけをなくしてしまい、動けなくなつた仲間に対しては無理に動かそうとはせず、そばに寄り添って、本人が自分で動けるまで1時間以上の時間が経つても最後まで職員は付き合います。お風呂に入る事を拒否している仲間には様々な声かけや配慮をしながら、強引にすることなく、ゆっくりと丁寧に待ちます。送迎バスから降りずに2時間待ち続け、最終的に建物に入らず、帰宅したケースもありました。たった一回、一日だからこそ、その1回を大切にしてください。今できる事を最大限やり続けています。その1回の積み重ねが仲間の行動に変化をもたせ、気が付けば移動する時間がほんの少し早くなつていたり、職員の声かけにスムーズに応じる場面が増えていたり変化がみられる様になりました。

「職員もいるから多分大丈夫ですよ」との声。では「受け入れましょう」とみんなまで合意して受け入れを決めました。緊急の受け入れはいつも慌ただしいですが、しらゆりの職員の言動に専門性を感じています。

緊急利用となった仲間との距離感

ある日、家族が緊急入院となり、仲間が市のワーカーさんと一緒に来所してきました。急な状況で、本人も理解できず、納得してない、不安で困惑した表情をしています。日中、通所している施設の職員の付き添いは無いようで、周りは知らない人ばかりの環境。「今日からどうなるんだろう」と見通しが持てない心境が伝わってきます。

まずは、今日から利用する居室を一緒に職員と見て歩きます。館内を説明しながら、職員は仲間との距離を探っていきます。表情を確認しながら、配慮や関わり方を見つけていくのです。最後にお風呂を確認した後のちよつとしたタイミングを見逃さず、誘うとそのまま浴室へ。スムーズに入浴ができたことで、みんなに褒められ、なんだか照れくさそうに食堂でテレビを見始めました。それを境に職員の声かけに応じてくれる場面が多くなっていきました。そんな初日でした。些細な事が仲間との

毎日の積み重ねは明日に繋がる

家族構成が変わり、突然、生活が今まですべて全く異なる仲間もいます。家族の体調不良により家に帰れなくなつてしまい、ロングのショートス

職員の肩をもらってくれるようになり、職員と楽しく話し、笑うようになりました。最近では、他の仲間を意識していたり、みんなと過ごす事を楽しみにしてくれるようになっていきました。

しらゆりの家は短期入所施設であるため、毎日、違う顔ぶれの仲間が利用しています。利用する理由も様々で、楽しみにしている仲間、家族の都合で利用している仲間、緊急で利用せざるを得なくなった仲間もいます。とりあえず、一晩雨風をしのげる場所であればどこでもという方もいます。しらゆりの家としてはどんな目的で利用しているか「泊つてよかった」「また利用したい」と思えるような取り組みや配慮を大切にしていきたいです。

しらゆりの家は、短期入所の大きな役割である無事に1泊を過ごすという場所に留まらず、仲間が豊かに自分らしく過ごせる場所となるような実践をしています。1泊2日の利用から始まる出会いを大切にしながら、仲間にとって「また来たい」と思える場所を目指していきたいと思っています。

しらゆりの家施設長 高橋 実

おひさま通信

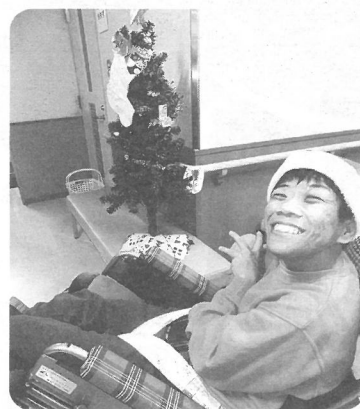
短期入所施設の取り組み

*** しらゆりの家 ***

しらゆりの家は、みぬま福祉会が平成28年より川口市から指定管理者の指定を受けて運営している単独型の短期入所施設です。短期入所専用の施設は全国でも貴重な社会資源であり、特に暮らしに関わる施設が不足している川口市においては重要な役割を担っています。現在、川口市内からの緊急利用の相談や困難なケースが増加しており、受け入れる判断も非常に難しいケースも増えていますが、しらゆりの家の職員はとも丁寧な配慮をしています。

緊急の受け入れは本心に急です

午後3時過ぎ、電話が鳴りました。「川口市の障害福祉課からです」と声がかかり受話器を取ると「急ですが、今日しらゆりの家の利用は出来ませんか」という依頼。どのような方ですかとの質問に「女性、40代、手帳Aです。どうでしょう」との返答でした。折



り返し連絡しますと電話を切り、しらゆりの職員と相談を始めます。今日、緊急での利用は可能か? 「どのような方ですか」と職員からの質問。しらゆりの家は初めての人の、40代、女性です。「他に情報はありますか」今のところ、これだけです。第一報では限られた情報の中で緊急の仲間を想像する事が多く、判断が難しい場面が多いです。

追加の情報が入ってきたので、職員に確認をします。ADLは見守りぐらいで大丈夫。穏やかな性格。「他の仲間とのマッチングは大丈夫ですか。服薬は」と具体的な質問がやってきました。しらゆりの職員も受け入れた時のイメージをしながら整理しているのです。他害行為は無いみたい。服薬は無し。17時に来所できるって。着替えは後から準備だね。一通りの情報が揃ったところで、周りにいる職員同士で確認し合います。「1人空いているので部屋は準備できます」

「職員もいるから多分大丈夫ですよ」との声。では「受け入れましょう」とみんなまで合意して受け入れを決めました。緊急の受け入れはいつも慌ただしいですが、しらゆりの職員の言動に専門性を感じています。

緊急利用となった仲間との距離感

ある日、家族が緊急入院となり、仲間が市のワーカーさんと一緒に来所してきました。急な状況で、本人も理解できず、納得してない、不安で困惑した表情をしています。日中、通所している施設の職員の付き添いは無いようで、周りは知らない人ばかりの環境。「今日からどうなるんだろう」と見通しが持てない心境が伝わってきます。

距離を近づけてくれた瞬間でした。断る理由ではなく、受け入れるための準備

医療的な支援が必要な方の利用希望がきました。まずは、利用を希望している仲間の基礎情報を家族や通所施設、相談支援センターなどに聞き取りながら収集していきます。しらゆりの家の利用が本人にとって安全なのか、受け入れる事のリスクはどれだけあるのか、何を準備する必要があるのか等を確認していきます。情報を収集するためには、仲間の通所先や学校まで出向き、本人の様子を確認する事もあります。必要があれば、主治医への確認、関係機関との情報共有や連携なども行います。

また、医療的なケアが必要になる仲間の受け入れの際には、法人の看護師や栄養士など専門職の方からの意見やアドバイスを踏まえた上で、受け入れの判断を行っています。断るためではなく、受け入れるために何

